

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720037

研究課題名(和文) 中世日本の仏教的世界観と「天皇」の社会的意義

研究課題名(英文) The Buddhist Worldview of Medieval Japan and the Social Meaning of the Sovereign

研究代表者

松本 郁代 (Matsumoto, Ikuyo)

横浜市立大学・都市社会文化研究科・准教授

研究者番号：60449535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、仏教的世界観を中心に捉えた「天皇」の社会・思想的意義について考察した。本研究が捉える「天皇」とは政治権力機構における天皇としてではなく、歴史叙述や編年体によって表現された「歴代」という認識下にある。これらを叙述するコンテキストやエクリチュールを読解することにより、政治・文化的イデオロギーとして形成された「天皇」の社会的意義を導いた。

平安時代中期以降に登場し近代になり解体される仏教的世界観の変遷は、一つの歴史認識の变成過程を提示する。各時代の中で作られた「天皇」とは、歴史の連続性や時代的普遍性を求める文化相伝や継承を目的とする、歴史叙述や系譜の起源をになう思想的存在としてあった。

研究成果の概要(英文)：This research considers the social and ideological significance of the sovereign as understood within a Buddhist worldview. This research understands 'tenno' not in terms of the mechanisms of the sovereign's political power, but rather as a concept constructed through the recognition of "eras" represented through historical narratives and chronicles. By reading the contexts and writing through which these are narrated, we can decipher the social significance of 'tenno' constructed as a political and cultural ideology.

Changing values within Buddhist worldviews, which emerged from the mid-Heian period and were dismantled in the modern period, display a single process of change in historical awareness. The tenno constructed in each historical period existed as an ideology that rested on historical narratives and genealogical origins that sought to establish cultural inheritance and succession through claims of historical continuity and universality.

研究分野：中世宗教文化史

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：仏教的世界観 須弥山世界 密教 天皇 歴史叙述 文化相伝 灌頂

1. 研究開始当初の背景

(1) 「荒唐無稽」な「天皇」の捉え方

申請者はこれまで天皇の即位儀礼の中でも「即位灌頂」という天皇が修す密教儀礼を中心に考察を進めた。その方法は主に即位法(寺家で作られた天皇即位の密教修法)が記述された宗教テキストの分析を通じ、歴史叙述に登場した王権のメカニズム、その思想性が構築した世界の探求である。従来、これらは「荒唐無稽」な内容のものと評価されてきたが、申請者はその作為性を積極的に歴史叙述として評価し、その意義を追究しようと試みた。近年の関連研究の多くは言説としての意義を求めた文学が、政治的的局面を追究した政治史や宗教史などがあるが、何れもこれらの叙述が中世史上に登場した意義を積極的に肯定し評価したものではない。

(2) 「天皇」の時空モデル

「即位灌頂」という中世に登場した修法は、確かに王権のメカニズムを支えたイデオロギーに帰結できるが、しかし、それらの思想的基盤は仏教的世界観にあった。仏教的世界観とは、中世という限定的な時間のなかで普遍性を有した一つの時空モデルである。いわば、「即位灌頂」とは、天皇を密教によって解釈する時空モデルで、一つの中世的パラダイムを形成している。これが「天皇」と如何に関わっていたのか。それは天皇の権力機構論や寺社勢力論とは別のパラダイムによって再考する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 中世における仏教と「天皇」

天皇が密教修法による王権護持の対象者であったことや、新嘗祭や大嘗祭など神祇祭祀を執行する資格者でもあったという解釈は、「天皇」の宗教的立場や存在意義が確定し、定説化していることを前提にした評価である。換言すれば、これは近代以降に作られた「天皇」の意味を、そのまま中世(前近代)

に用いたものといえる。現在の「天皇」の意味はイメージを含め近代以降に成立したものであり、テーマとして「天皇」を考察することは、いわば近代以降の意味をそのまま用いるということになる。勿論、天皇を解釈する上での意味や思想が前近代において未成立であっても考察を妨げることはない。しかし、分析対象とする用語自体が近代以降の成立にもかかわらず無批判にその意義を導き出すことは、時代毎の歴史的意味を度外視しているに等しく、近代以降に成立した用語のイデオロギー性を常に踏まえる必要がある。それは前近代と近代以降の時代を隔てているパラダイムの違いを捉えることでもあるが、注意したい点は、両時代が歴史的に隔絶しているとの主張ではなく、近代以降、それまでとは異なる新たなパラダイムが登場してきたという意味である。

近年の中世史や文学、思想史研究のテキスト分析に導かれた中世日本の宗教解釈は、「宗教世界」とも換言できるパラダイムにある。仏教は現在のように宗派の別や教義が固定しておらず神仏習合や修法が創出され、それらを担う組織も言説や教理と一致せずに流動的であり、少なくとも教派神道組織や真言密教界において単一系譜上の教義や言説は存在し得なかった。

よって、このような「宗教世界」における中世の宗教的性質、それに関わる「天皇」について考察し、その社会的意義を追究することを目的とした。

(2) 中世の「天皇」と社会的意義

「宗教世界」において「天皇」がどのような存在意義を有していたか、またその社会的意義はどのように機能したのか。一つの「解」として、黒田俊雄氏の研究に代表される寺社勢力論や顕密主義的仏教がある。しかし中世における「天皇」の実態を、天皇に言及する宗教組織は明確に認識していたのかという

疑問が残る。

本研究の基底には、中世における「天皇」の実態とは、権威・権力の主体的側面に見いだされるのではなく、仏教や神祇が「天皇」を自己再解釈することによって作り上げてきたとする考え方がある。だからこそ「天皇」をめぐる（時に荒唐無稽で非実体的であるとの評価を受ける）様々な仏教的世界観が作り出されたといえる。しかし、注意深くみるとこれらの多くは、仏教的世界観に基づく「天皇」の支配領域に関する叙述であった。実体的な天皇を前提とすれば、かかる仏教的世界観は顕密主義的なイデオロギーとして解釈される。これらを宗教的言説として捉え、これらが構築した世界を捉えていく研究は文学研究によってある程度進められており、本研究では主にこちらの研究成果を踏まえている。

3. 研究の方法

(1) 宗教解釈と「天皇」の意義

近年歴史学の分野では、政治的・文化的・宗教的観点から中世の天皇儀礼や王権研究が進められている。特に、政治的観点からみれば形式化された天皇儀礼であっても、宗教理解にもとづけば、新たな「天皇」の社会的意義やその世界観が登場し、儀礼行為の意味を作り出している。宗教理解を主体にした「天皇」解釈は、天皇を宗教儀礼の主体者あるいは文化的存在として理解できる。

かかる「天皇」の意義を探求することは、ア priori にその前提となる存在意義を認定していることになるが、本研究はその考えにはない。むしろ中世という時代は、かかる意義が生まれる、作りだされる、あるいは、変容の過程にあると考えている。そのため、本研究のテーマに挙げた「天皇」の社会的意義とは、無批判に歴史的な「天皇」の社会的意義を認めているものではない。

宗教による「天皇」理解とは、歴史的に捉

えれば天皇の外部（つまり宗教）から意味を付会されるものとして解釈される。しかし、「付会」される宗教構造がなぜ登場したのかについては論じられていない。これは先に述べたように「天皇」の意味が近代以降に作られたため、前近代的な状況にあった「天皇」の存在自体が近代的な「天皇」の概念を借りたままの状態になっていることと関連する。宗教的に解釈された「天皇」の社会的意義を導く前提として、前近代的（中世的）な「天皇」がどのような存在形態におかれているかを明確にする必要がある。

現在のところ天皇を頂点とする身分秩序や、天皇を中国皇帝と比較する研究を前提とする研究は多いが、支配関係や身分制のなかに「天皇」が解消されている印象を受ける。

以上、本研究では、「天皇」に関わる宗教テキストや歴史叙述の分析を通して、解釈された「天皇」が逆に社会的に何らかの意義を有していたのか、天皇の実体面を重視した支配関係や身分制とは異なる次元の視点から、天皇の社会的意義を論じる方法を採用した。

(2) 分析の視点と方法

「仏教的世界観」の構造と実態について

本研究の前提として「仏教的世界観」の原典・種類・構造・思想基盤に関して、特に密教（天台・真言）における日本独自の作為性に関する検討を行った。さらに須弥山世界などはインドを発祥とするため、日本における独自の展開についても踏まえ論証した。また、これらの世界観が中世ではいかなる影響を及ぼしていたのか検討した。

仏教的世界観における「天皇」

の成果を踏まえた上で、中世に構築された仏教的世界観に「天皇」がどのように関わり、解釈されたのかを検討した。特に「天皇」が仏教的世界観によって解釈された点を、機能面・思想面から論じた。

また仏教的世界観とは、仏教であれば密教の世界や須弥山世界、神祇であれば神話によって構成される。これらの多くは、記述/叙述された資料に登場する。史実や内容に関する史料批判はもちろんのこと、叙述/記述自体に対するテキスト批判や文芸理論を踏まえた資料の分析を進めた。

宗教理念と文化形成

を踏まえ、改めて、中世における「天皇」とそれに関わる宗教理念が作りだした社会的意義に関する分析を行った。宗教界を離れて形成された文化相伝の系譜を支えるものとして「灌頂」が挙げられる。灌頂とは秘伝を伝える儀礼であり、その思想は仏教的世界観にもとづいている。「灌頂」儀礼のうち、「即位灌頂」は仏教的世界観に「天皇」の身体を位置づけたものであり、この「即位灌頂」をめぐる仏教的世界観は、まさに文化形成にも深く関わっていた。本研究ではその点を中心に検討した。さらに叙述としての仏教的世界観に登場する「天皇」が文化相伝の系譜の起源に位置づけられている点に関する考察を進めた。

以上の考察により、天皇の「即位灌頂」における仏教的世界観と、そこに位置づけられた「天皇」の存在意義を社会構造的に見出し、このような「天皇」のあり方を有した中世の「宗教世界」について、権力や権威論とは別の観点から論じた。

4. 研究成果

(1) 前近代的「世界」を論じる前提

仏教的世界観の種類

仏教的世界観とは主に二つの観点から説明できる。一つは『俱舍論』に登場する須弥山を中心とする宇宙観であり、もう一つが真言密教における大日如来を頂点とする神仏の序列である。中世における仏教は、狭義としての宗教ではなく多分に政治・文化的なイ

デオロギー性をもつ。その典型として仏教的世界観を取り上げた。本研究では、これらの中世の国土観や神話の土台となる枠組み、思想に位置づけ、そのイデオロギー性を提示するものとして、或いは、中世社会における文化体系の起源的世界として捉え、かかる仏教的世界観の社会的意義を求めた。換言すれば仏教的世界観とは歴史的文脈の中で作られた政治・文化的イデオロギーであり、それは宗教界のみならず世俗社会にも波及していた。また、これらは政治権力の局面から仏教を捉えた顕密主義仏教と異なる位相にある。

歴史叙述にある普遍性と「天皇」

時代毎に事象を追求する歴史的指向性に対し、仏教的世界観は一種の普遍性を指向している。本研究では、文化継承や文化起源の問題に普遍性を求める指向性が登場した点に関する考察を進めた。特に、文化継承やその起源に「天皇」が位置づけられており、かかる「天皇」を中心とする身分・文化体系が存在していた点を導いた。

その仕組みは「歴代」としての「天皇」が編年体をとる歴史叙述によって表現され、これらのエクリチュールにある「天皇」とは、中世のテキスト解釈によって見いだされた。また、その思想性とは、継起的な時間を保証する存在としてあり、実権力を離れた「天皇」を叙述するコンテクストにあった。すなわち「天皇」とは、一種の普遍性を持ちながら身分・文化体系におけるイデオロギーを形成した思想的存在であった。

(2) 神話的身体としての「天皇」

密教化する「天皇」

密教化した「天皇」とは、密教によって「歴代」の「天皇」という編年体の歴史叙述によって、各時代を貫く存在に位置づけられたものである。また、これらは時代的な「普遍性」を表すエクリチュールに見いだすことがで

きる。かかる視点から分析した『愚管抄』や『古今和歌集』の秘伝書における「天皇」とは、神話や密教によって解釈される存在であるとともに、その「天皇」の存在意義が文化相伝や仏教的世界の起源的存在として再構築されていたのである。これらは密教によってその意義が形成された、いわば密教化された「天皇」であった。このような「天皇」を叙述した歴史的コンテクストやエクリチュールの分析からその社会的意義を明らかにした。また、これらは言説として叙述から独立した意味を捉えるのではなく、中世の国土観や神話の土台となる枠組み、思想に位置づけ、そのイデオロギー性を提示するものとして理解すべきである。

神話化する「天皇」

記紀神話の注釈として登場した言説群が「中世神話」や、より広い意味で「日本神話」として概念化されている。しかし、これらの主人公は必ずしも神仏や天皇ではない。むしろ仏教的世界観に神仏や「天皇」の存在領域が開拓されているのである。もちろん、かかる言説のすべてが当てはまらないが、密教や神話によって解釈された「天皇」の存在領域が仏教的世界観によって社会的意義を獲得していく文脈を読み取ることができる。本研究ではこのような天皇の存在を「神話的身体」として捉えた。これらは従来天皇の「聖」性として理解されている面もあるが、むしろ社会性をもつ点では「俗」的な身体であったと評価できる。

(3) 文化相伝にみる秘説と社会

秘説の社会的意義

「秘説」とは、ある流派や系譜の文化相伝の際に伝えられる教えのことで、流派や系譜を形成する上で絶対的であり独占的な内容を指す。また秘説の相伝は、灌頂形式を採ることからも仏教的世界観を土台にしている

ため自ずと(1)(2)とも関連する。日本に文化相伝の対象となる秘説が登場したのは平安時代中期以降である。かかる秘説は、従来、その相伝母体が仏教界と一線を画すものであるため、仏教とは異なる文化的次元の問題として理解されてきた。しかし、顕密主義の登場期と軌を一にしている点から、仏教界の政治権力を支える指向性が政治のみならず、文化的イデオロギーのよっても支えられていた点を指摘した。また「天皇」の密教化と秘説が登場する時期も同じである点は、文化的イデオロギー形成において神話的身体をもつ「天皇」の存在が文化形成の核となっていたと結論づけることができる。これらは文化相伝における「秘説」という、一つの社会文化的な営為のなかに見いだすことができる。

起源としての「天皇」

以上に示した「天皇」は、過去に前例のない「歴史」を語る際の起源や、歴史の起点に位置づけられた点にその社会的意義を見いだすことができる。

仏教的世界観は、近世以降、西洋からの科学的知識などの新たな学問によって解体された。幕末の仏教天文学(梵曆運動)の登場は、仏教的世界観に対する科学的疑義追究の果てに、科学的事実ではなく宗教的真理としての宗教性を発見することにもつながった。このように、平安時代中期以降に登場した仏教的世界観の変遷は、一つの歴史認識の变成過程を提示している。

それぞれの時代において展開した「天皇」とは、近代以降に成立した概念としての聖/俗という境界性や国家の政治機構や社会的権威に位置づけられるものではなく、歴史や時代的普遍性を求める文化相伝や継承を目的とする、歴史叙述や系譜の起源をになう思想的存在としてあったといえる。またそれは実権力をともなわず「宗教世界」の中で展開

していた。

今後の課題としては、このような仏教的世界観を土台とし、思想的存在であった「天皇」の社会性というものが、前近代日本においてどのように展開し、現在の文化的様相に関わっているのか、起源や起点のみならず、「日本文化」という論理性のなかに組み込みながら考え、「日本文化」解釈の一端を解明する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

・松本郁代「『古今和歌集』注釈にみる秘説の視覚性—見立てと時空間の構成をめぐって—」(『風俗絵画の文化学 瞬間をうつすフィロソフィー』思文閣出版、2014年11月刊行予定、査読無)

・松本郁代「歴史構想にみる神話的身体としての天皇—慈円『愚管抄』にみる正統性の定型をとおして」(『日本文学』721、pp.16~26、日本文学協会、2013年、査読有)

・松本郁代「中世における天皇の身体と即位灌頂」(『日本思想史』44、日本思想史学会、pp.5-12、2012、査読有)

・松本郁代「即位灌頂と和歌—密教的世界観における芸道と皇統の継承」(錦仁編『中世詩歌の本質と関連』竹林舎、pp.221-244、2012、査読無)

[学会発表](計9件)

・松本郁代「中世日本の中宮御産と仏教」(The CJRC Gender and Ideology in Japanese Religious Life project presents: Women in Japanese Buddhism: An in Reading Workshop, Center for Japanese Religions and Culture, University of Southern California 主催 : 南カリフォルニア大学日本宗教文化センター、アメリカ、2014年3月20日)

・松本郁代「即位灌頂と仏教的世界観」(神

奈川県立金沢文庫連続講座「王権と真言密教」神奈川県立金沢文庫、2014年2月22日)

・松本郁代「横浜市立大学所蔵古地図コレクションについて—地球のかたちと万国の大地」(横浜市立大学学術情報センター市民講座、横浜市立大学、2013年9月14日)

・Ikuyo Matsumoto, “Japan’s imperial lineage during the Kamakura period and Nambokucho period” (Reading Japanese pre-modern texts from a transcultural perspective, Heidelberg University, Germany, 2012.9.11)

・松本郁代「中世王権と夢想」(共同研究会「夢と表象—メディア・歴史・文化」、国際日本文化研究センター、2012年7月15日)

ほか

[その他]

・横浜市歴史博物館編『横浜市歴史博物館企画展 横浜市立大学コレクション古地図の世界—地球のかたちと万国の大地』(横浜市歴史博物館、2013年刊 総論および解説執筆)

6. 研究組織

(1)研究代表者

松本 郁代 (MATSUMOTO, Ikuyo)

横浜市立大学・都市社会文化研究科

准教授

研究者番号 : 60449535